

祖国、敗れて

ジャラルッディーン・マングベルデイの生涯

1219年から始まったチンギス・ハーンの征西により、ホラズム・シャー朝は滅亡しました。中央アジアのみならず、ペルシャやアフガニスタンにまで及ぶ大国の支配は終わり、モンゴルの西方遠征が始まります。その時、破竹の勢いで東から押し寄せるモンゴル軍に勇猛果敢に立ち向かった人物がいました。ジャラルッディーン・マングベルデイ、ホラズム・シャー朝最後の王です。今回の英雄列伝は、中世のシルクロードを彗星のように駆け抜けて散った、一人の男の生涯に触れます。

モンゴル征西の発端

「オトラル事件」

1218年、現在のカザフスタンにあるオトラルで発生した「オトラル事件」がモンゴル征西の発端とされています。チンギス・ハーンは、オトラルへ遣わした使節団が時のオトラル総督であったイナルチクによって虐殺され、運んできた荷を奪われるという屈辱を味わいます。このイナルチクの愚行がなければ中央アジアの歴史は変わったのかもしれないが、イナルチクは使節団がモ

ンゴルのスパイということを見破っていたため、このような行動を起こしたという説があります。当時、東の「金」を平定したチンギス・ハーンの次の侵略の先は西であることは明白であり、西のホラズム・シャー朝の最前線の町オトラルへスパイを遣わして、城門や兵隊の配置等を事前に窺おうとしていたのです。

イナルチクの意向はともあれ、ホラズム・シャー朝の支配下にあったオトラルはチンギス・ハーンの怒りを買ひ、翌年モンゴル軍

の大遠征によって陥落します。そしてチンギス・ハーンの怒りは、ホラズム・シャー朝の本営へと向けられます。モンゴルの大軍勢は、ホラズム・シャー朝の領土にあったサマルカンド、ブハラ、メルブ等主要な都市を徹底敵に破壊しつつ西へと進軍して行きました。

王朝の抱えた内政問題

ジャラルッディーンの祖父、アラウッディーン・テキシュは、カンクリという部族の女性を妃に娶りました。モンゴル襲来当時、

彼女の力によりカンクリ族がホラズム・シャー朝内で権力を持ち始めていました。カンクリ族が政権を乗っ取るような気配の中、軍を一つに集めるとクーデターになる恐れがあったのです。そのためジャラルッディーン・ムハンマドは各地に軍を分散し、モンゴル軍を迎え撃つ戦法を取らざるを得ませんでした。強大な軍隊を持ち、モンゴル軍と互角に戦う軍事力を擁しながら、この内政問題のために軍を一つにまとめるこ

とができず、王朝内の町はモンゴル軍の前にことごとく陥落していきます。アラウッディーン・ムハンマドはモンゴルの襲来から逃れ、カスピ海の孤島で病死します。王は他界し、東からは怒涛のように進軍して来るモンゴルの脅威にさらされたホラズム・シャー朝。アラウッディーン・ムハンマドはその死に際し、自分の後継者にジャラルッディーンを指名し、彼にホラズム・シャー朝の命運を託しました。

インダス河畔の戦い

ジャラルッディーンはモンゴルとの戦いから戻った少ない軍隊と、モンゴルに対抗する諸民族の部隊を集め、モンゴル軍に対抗します。モンゴル軍に包囲された

現在のタジキスタンのホジヤンドから逃れたホジヤンド総督のティムール・マリクとウルゲンチで合流し、現在のイランのニシャプールへ向かいます。その後、アフガニスタンのバルワーンでモンゴル軍を破った後、彼の軍はインドへ向かいます。インダス河畔の戦いでは、モンゴル軍に包囲されて追い詰められますが、彼は鎧を脱ぎ捨て、盾を背負って乗馬し、そのままインダスの大河を渡り切りました。その姿を見たチンギス・ハーンは、ジャラルッディーンを追撃しようとする自分の部下達に対し、彼を見習うよういさめたと言われています。

最後の王の終焉

ジャラルッディーン之母はインド出身でした。母が生まれた地のインドに約3年滞在したジャラルッディーンは、その後イラン、アゼルバイジャンと転戦し、コーカサスに入ります。グルジアを破った後、西アジアのイスラム諸王朝の影響下にあったアナトリア高原に入りました。しかし、現在のトルコのエルジンジャンで

アイユーブ朝とルーム・セルジューク朝の連合軍に大敗を喫した他、チオルマゲン率いるモンゴル軍の追撃部隊にも敗れます。そして、ディヤルバクルで恨みを抱かれたクルド人に殺害され、その生涯を閉じました。そしてここに、154年続いたホラズム・シャー朝は終焉しました。

ホラズムの英雄

ホラズム・シャー朝の名を冠したウズベキスタンのホラズム州。その州都ウルゲンチには、ウズベキスタン各地に立つアミール・ティムールの像に替わり、ジャラルッディーン像が立っています。ホラズムの人々は、14世紀に自分たちの地を侵略したティムールよりも、モンゴルに勇敢に立ち向かったジャラルッディーンを英雄と見なしている証です。モンゴル襲来から12年の間、国破れて新天地を求め中央アジアからイラン、アフガニスタン、インド、コーカサス、トルコとシルクロードを駆け抜けたジャラルッディーン。彼の像は、今も故郷ホラズムに立ち続けています。



ウルゲンチに立つジャラルッディーン像



ティムール・マリク像(ソグド州立博物館/ホジヤンド)

COLUMN ジャラルッディーンとティムール・マリク

1219年、モンゴル軍に包囲された当時のホジヤンドの司令官だったティムール・マリク。ホジヤンドがモンゴルの手に落ちる直前、陣を張ったシルダリア川の中州から小舟でシルダリアを下って脱出し、ウルゲンチでジャラルッディーンと合流します。その後、ジャラルッディーンと共に転戦し、アナトリアでジャラルッディーンが最期を迎えるまで、彼と共に生きたのでした。

ジャラルッディーン生誕800年を記念して発行されたウズベキスタンの旧25スム硬貨

関連ツアーのご紹介

タジキスタンとテルメズの遺産

東京・大阪発着 | 9日間